

青少年育成センターだより

第49号 平成30年9月



運動会のシーズンです。練習で疲れて帰ってくる子どももいることでしょう。でも、翌朝にはケロッとして登校……。子どもには、そのような疲れをもろともしないエネルギーが体の中にあるようです。子どもをたくましく育てたいものですね。



やめよう体罰、やめよう暴言(2)

48号に引き続き、内閣府が発行している「愛の鞭をやめて、子どもを健やかに育みましょう」から、子どもの育み方について考えてみましょう。

ポイント5 子どもの気持ちと行動を分けて考え、育ちを応援

子どもに「イヤだ!」と言われたとき、親自身が戸惑うこともあるでしょう。でも、2、3歳の子どもの「イヤ」は自我の芽生えであり、成長の証しでもあります。「どうしたらいいかな?」と、子どもの考えを引き出し、必要に応じて助け船を出しながら、子どもの言い分を気長に聴きましょう。「わがままな子になっては困る」という思いから、親は指示的に対応してしまうこともありますが、子どもの成長過程で必ず通る道だと大らかに構えて、子どもの意志を後押ししていきましょう。

体罰・暴言は脳の発達に深刻な影響を及ぼします。

脳画像の研究により、子ども時代に辛い体験をした人は、脳に様々な変化を生じていることが報告されています。親は「愛の鞭」のつもりだったとしても、子どもには目に見えない大きなダメージを与えているかも知れないのです。

- ・ 厳しい体罰により、前頭前野(社会生活に極めて重要な脳部位)の容積が19.1%減少
- ・ 言葉の暴力により、視聴覚野(声や音を知覚する脳部位)が変形

体罰は百害あって一利なし。子どもに望ましい影響などはもたらしません。

親による体罰を受けた子どもと、受けてない子どもの違いについて、約16万人分の子どものデータに基づく分析が行われています。その結果、親による体罰を受けた子どもは、次のグラフのとおり「望ましくない影響」が大きいということが報告されています。(ここでは、グラフは提示していません。ご覧になりたい方は内閣府のホームページで)

- ・ 親子関係の悪化
- ・ 精神的な問題の発生
- ・ 反社会的な行動の増加
- ・ 攻撃性の増加

前号から、「体罰と暴言」について考えてきました。いかがでしょうか?体罰と暴言は子どもにとって良くない指導であることが分かっていただけでしょう。どの親にも「子どもには、良い子に育てて欲しい」という願いがあります。そのことにより、余計に感情的になりやすいものですね。

「叩かない、怒鳴らない」を心に決め、一度叱り方を頭の中で考えてから(クールダウンをして)、想いを言葉に出すようにしましょう。子どもの健やかな成長のために……。